人吉・球磨
風水・祈りの浄化町
日本遺産

青井阿蘇神社・天門（北西）

風水思想で建立された国宝神社

「南方の池は神様の姿を写すであろう、北方は人々の騒がしい生活を阻むであろう、東方の高く聳える城郭は猛族の進入を阻むであろう、西方にひろがる林は暴風や火災を防ぐであろうから、この場所は神を祀るに最もふさわしい場所なのである。」と、青井阿蘇神社の古い棟札に記されています。また別の見地から、風水思想の「四神相応（ししんそうおう）」の地」として考えることができます。四神とは、青龍（せいりゅう）・朱雀（すざく）・白虎（びゃっこ）・玄武（げんぶ）という霊獣で、この四神に護られた池こそ富に恵まれ子々孫々まで繁栄する「未来永劫の吉祥の地」であるという考え方です。

～青井阿蘇神社公式WEBより～

2008年に国宝指定（熊本県初国宝指定建築物）。その独特の建築技法とデザインの価値が非常に高いとされています。

しかし令和2年7月、人吉球磨を襲った記録的豪雨により、青井阿蘇神社も甚大な被害を受けました。国宝指定を受けた社殿群が浸水し、楼門（国登録有形文化財）は欄干が流され無惨な姿に。現在も復旧工事が進められています。

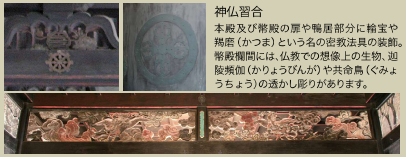
神社創建は平安時代初期の大同元年（806年）。阿蘇市にある阿蘇神社の分霊が祀られています。

国宝に指定されているのは、本殿や廊、幣殿、拝殿、楼門の5棟と、造営時の棟札（工事の由緒、建築年月日、工人の名前などを記した札）1枚、改築時の銘札（改築の内容などが記された札）5枚。

これらは慶長15～18年（1610～1613年）の4年をかけて造営され、創建からなんと400年以上の月日が経っています。

青井阿蘇神社が国宝指定された理由

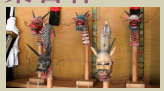
- ◆中世球磨地方独特の意匠をベースに、当時の最先端であった桃山時代の華やかな意匠を取り入れている。
- ◆完成度が高く、その後、近世球磨地方で作られた社寺建築の手本となっている。
- ◆彫刻技法、特異な拝殿形式などは、南九州地方の広い範囲で影響が認められる。



神仏習合
本殿及び幣殿の扉や鴨居部分に輪宝や羯磨（かつま）という名の密教法具の装飾。幣殿欄間には、仏教での想像上の生物、迦陵頻伽（かりょうびんが）や共命鳥（ぐみょうちょう）の透かし彫りがあります。

多様な文化の集合体

二十四孝
中国の元時代、郭巨業（かくきょぎょう）という人が、二十四話の親孝行物語をまとめ、家庭教育（幼児教育）に使ったとされています。日本には5世紀初頭、儒教とともに流入し、のちに禅僧たちにより文学のひとつとして取り入れられました。青井阿蘇神社の社殿には、二十四話のうち、六話の彫刻があります。

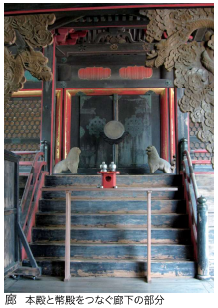


陰陽五行説
『古代中国に起源とする哲理で、一切の万物は陰陽の二気によって生じ、五行中、木・火は陽に、金・水は陰に属し、土はその中間にあるとし、これらの消長により天地の変異、災祥、人事の吉凶を説明する。（広辞苑）』という陰陽五行説にならって造られた五色の幡。

青井の杜 国宝記念館
社務所、ギャラリー、参集殿が一体化。設計は世界的な建築家・隈研吾氏。スギ材で茅葺きをイメージした屋根が特徴的です。建物は木材をふんだんに用いた本格的な木造建築です。

日本唯一「人吉様式」
他に類を見ない装飾は、楼門の四角、屋根の軒下部分に置かれた四対の神面です。それぞれ異なるお顔をした陰陽一対の面で、人の心の和やかさを陰の「和魂（にぎみたま）」、荒々しさを陽の「荒魂（あらみたま）」として表現しています。昭和19年、調査に当たった京都大学の矢崎美盛教授が、著書「様式の美学」で、この神面を「人吉様式」と名付けました。

青井阿蘇神社（あおいあそじんじゃ） ☎0966-22-2274
所 人吉市上青井町122 地 P122・C3



廊 本殿と幣殿をつなぐ廊下の部分
左右に阿吽の形相の龍の彫刻

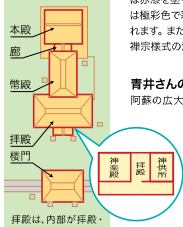
遷宮棟札（写真提供／人吉市教育委員会）
慶長15年、造営時に工事の由緒等を記した札。この棟札の他、改築の際に記された5枚の銘札も国宝の附（つけたり）指定に。

本殿 神様がお住まいになる母所。×印の桟（さん）は、この地方独特のもので、魔除けの意味があるとされています。

拝殿 参拝者が神様にお祈りする場所

幣殿 神主が神様にお祈りする場所
幣殿上部の赤と緑で色付けされた格狭間（こうざま）という模様は本来、仏像などを安置する須弥壇（しゅみだん）の基礎の部分に用いられるもの。建物の上部に設えてあるのは、この地方独特の様式。

〔社殿群〕



拝殿は、内部が拝殿・神楽殿・神供所の三部屋に仕切られているのが最大の特徴。

楼門
社殿すべて黒を基調に漆を、細部の木組みには赤漆を塗り、各所に装飾を施し、彫刻・紋様は極彩色で彩色する技法は「桃山様式」と呼ばれます。また高さ12mにも及ぶ楼門の造りは禅宗様式の流れをくむものです。

青井さんの神様

阿蘇の広大な原野を開拓したという阿蘇神社の御祭神十二神のうち、三神の分霊が、平安時代初期の大同元年（806年）9月9日（重陽の日）に祀られました。御祭神は、健磐龍命（たけいわたつのみこと）、妃・阿蘇都媛命（あそつひめのみこと）、そのお二人子供の國造速瀬玉命（くにのみやつこはやみかたまのみこと）の三柱の神です。